

昭和62年7月25日発行

八雲立つ風土記の丘 No84 抜刷

天寺平廃寺について

斐川町教育委員会

てん じ ひら 天寺平廃寺について

斐川町教育委員会

はじめに

天寺平廃寺は、島根県^{ひかわ ひかわ しもあぐ}簸川郡斐川町下阿宮に所在する。言うまでもなく、伝承や文献をもたない古代寺院であり、最近までその存在すら知られていなかった。

よって、遺跡名は旧字名の「天寺平」からとっている。その名が示す如く斐伊川からの比高約180メートルの山頂に立地するため、遺跡の保存は極めて良好である。基壇や礎石の一部は地表に露出しており、また、廃寺後整理された瓦類も寺域の一角に山積されたままの状態にある。

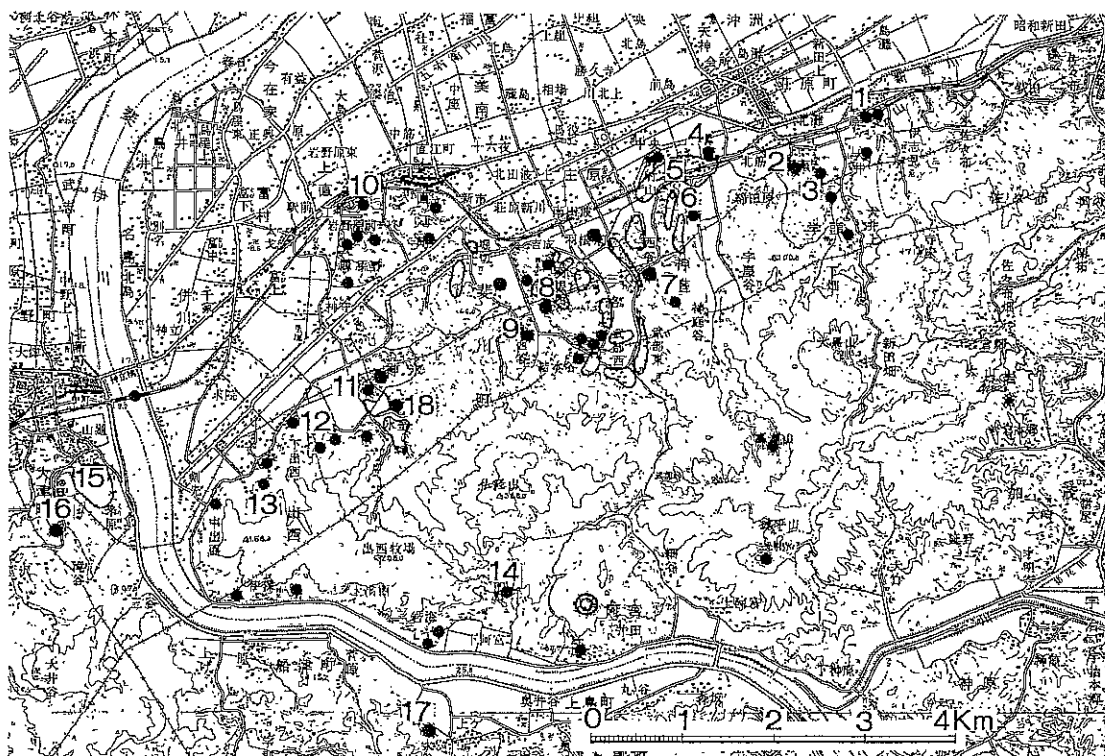
この様に貴重な遺跡であり、本格的調査も

将来実施されるであろうが、本廃寺が出雲地方の古代史および考古学の研究に与える影響は少なくないと考えるので、取り急ぎその概要を本紙上を借りて紹介する。

位置と環境

天寺平廃寺は斐川町大字阿宮2338—1番地他で、標高200メートルの山頂に位置し、北西に仏経山(733年に編纂された『出雲国風土記』以下『風土記』とする一に記載されている^{かん}神名火山に比定されている)を仰ぎ、眼下に斐伊川を見下ろすことができる。

この仏経山北麓を中心に斐川町には多くの遺跡が存在している(図1)。縄文時代の遺跡



◎ 天寺平廃寺 1.軍原古墳 2.大倉横穴墓群 3.大井城跡 4.神庭岩船山古墳 5.神庭丘陵北遺跡 6.小丸子山古墳 7.荒神谷遺跡 8.結遺跡 9.結城古墳 10.岩野原古墳群 11.城山古墳群 12.後谷古墳群 13.山ノ奥横穴墓群 14.高野古墳群 15.西谷墳墓群 16.長者原廃寺 17.上乗寺 18.曾支乃夜社

図1 天寺平廃寺と周辺の主要遺跡

としては、平野丘陵から石鏃、石槍が、^{がくとう}学頭
の永徳寺、^{みつがね}三絡の波知神社周辺より石斧、石
鏃が採集されている。また、直江の^{むすび}結遺跡より
刺突文、条痕をもつ縄文土器や石器が出土
している。

弥生時代の遺跡としては、大量の銅剣、銅
鐔、銅鉾が出土した荒神谷遺跡や、工事中に
多量の土器が出土した斐伊川鉄橋遺跡が挙げ
られる。また、斐伊川左岸の出雲市大津町に
は弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓5基以上
を含む西谷墳墓群が存在する。

古墳時代前期の遺跡は現在のところ確認さ
れていない。しかし、中期になると神庭岩船
山古墳(前方後円墳、全長57メートル)、小丸
子山古墳(円墳、径35メートル)などの大形
古墳が築造される。

一方、中期末から後期にかけて結古墳、岩
野原古墳群などの小規模古墳および横穴墓が
著しく増加するが、その多くは^{かんげ}神庭、^{なおい}直江、
^{しゅつさい}出西地区に集中している。また、古墳時代か
ら奈良時代にかけては、丘陵縁辺部より多く

の遺物が採集されている。

なお、これら遺跡の大部分は前述したよう
に仏経山北麓を中心に所在しており、斐伊川
流域部には切石の横穴式石室をもつ^{たかの}高野古墳
群(3基)や数群の横穴墓しか確認されてい
ない。

しかし、本廃寺のある下阿宮は、^{かど}神門、^い飯
石、大原の三郡と接した河内郷のほぼ中央部
に位置しており、この各郡を結ぶ通路・斐伊
川を掌握することができる重要な位置を占め
ていたものと考えられる。

また、対岸の出雲市には、河内郷新造院の
^(世1)比定地とされる上乘寺(上島町)や^(世2)長者原廃寺
(上塩冶町と大津町の境界の丘陵に位置す
る)が存在する。

寺域と伽藍配置

今回の調査では、地形測量を中心に若干の
遺物採集をおこない、塔および金堂の基壇と
礎石、瓦溜^{だまり}を確認した(図2)。

寺域と考えられる平坦面は、東側および南
側の寺域界はかなり明確であるものの、西側

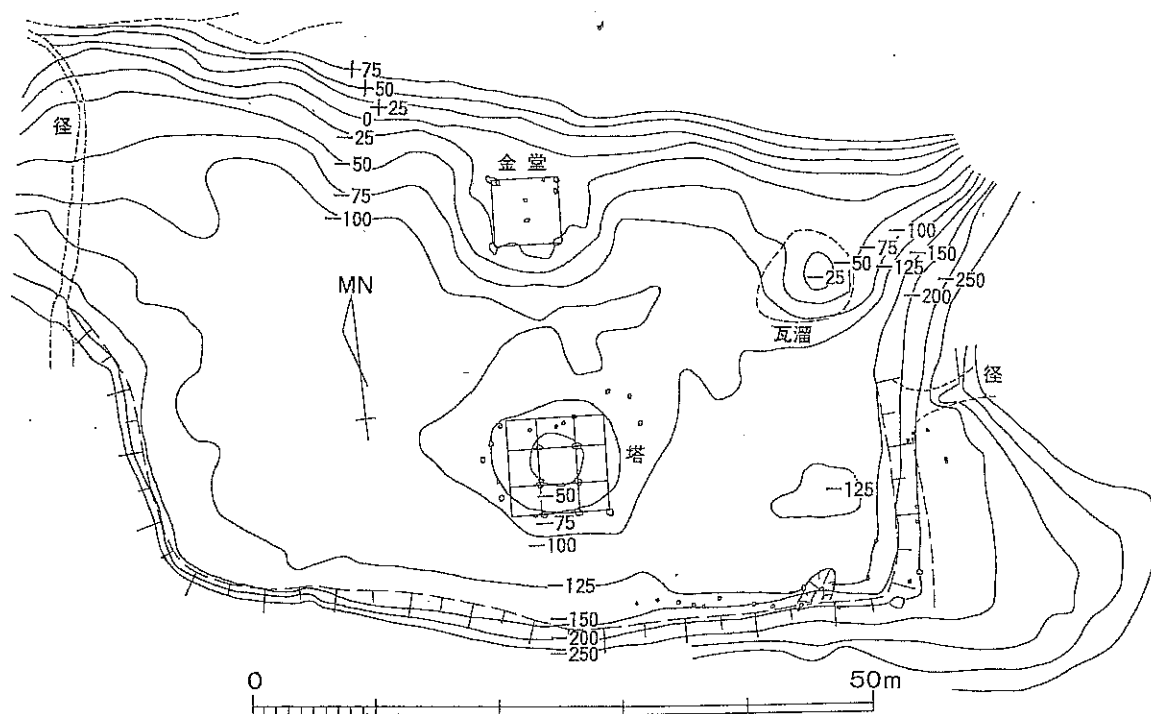


図2 天寺平廃寺地形測量図



天寺平廃寺遠景（↓の部分に所在する。南から写す。）

がやや不明瞭であり、北側は斜面になっている。よって正確な数値は不明といわざるを得ないが、現段階では東西約65メートル、南北約45メートルを測ることができる。これは、山頂部という地形上の制約を受けつつも半町四方の寺域を意識して建立していたのではなかろうか。

伽藍^{がらん}については、中央部やや東よりに塔および金堂が存在する。礎石の残存状況から南が層塔跡、北が金堂跡で、入口（門）は地形から見て東側にあったものと考えられる。中央部より西側においては礎石などの遺構は確認できなかったが、かなりの平坦面があることから、何らかの建物があつたと推定される。

なお、南側縁辺部には築地などの存在を思わせる小さな石が数十個存在する。

塔基壇は、全体的に流失しているものの残存高約50センチ、東西約11メートル、南北約11メートルを測る。礎石は原位置と考えられる8個が残存し、さらに西側にも礎石が数個点在している。各礎石の心心距離（東西および南北の柱間）は外の間が2.4メートル（8尺）、中の間が3メートル（10尺）である。

金堂基壇も塔基壇と同様かなり流出している。また、北側が斜面になっているため正確な数値は不明であるが、現況から判断して上面で東西約10メートル、残存高75センチを測り、原位置と考えられる礎石が4個残存する。この礎石の心心距離から柱間は5.4メートル（18尺）である。

南北に併置された塔と金堂の二つの基壇は礎石の西辺を揃えており、金堂の礎石の東ラインは塔の中の間東ラインと一致する。これらを結ぶ線はN-4°-Eでほぼ真北を指

す。

伽藍全体の配置は前述したように、山頂という地形上の制約を受けたためか中軸線に対し、塔、金堂の位置が北にずれているものの、入口（門）、塔、金堂の位置関係から現段階では法隆寺式が想定される。

瓦について

寺域北東隅に径8メートル、高さ50センチに積まれた瓦溜が存在する。

この瓦溜から多数の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の他、^{せん}塼などが採集される。これらの瓦類はほとんどが破損しており、軒瓦の瓦当面が完全なものもない。瓦溜の中から軒丸瓦2点、軒平瓦6点、丸瓦2点、平瓦6点、塼1点を採集し、他の膨大な量の瓦類は、後日の資料とするために現地にそのまま残し保存を図った（図3）。

なお、土器類など日常什器は今のところ発見されていない。

1) 軒丸瓦 単弁8葉蓮華文軒丸瓦。圏線で区画された中房には、大振りの蓮子が1+4の配置をとる。内区の主文は単弁蓮華文である。2重の陽線で表現された蓮華文が長楕円形の子葉を取り囲む。内区と外区も圏線で画され、外区内縁には唐草文が配される。唐草文は巻蔓と反転する巻蔓が交互に置かれるが、小葉はみられない。巻蔓は長さ3センチ程で末端が圏線に接してはいない。外縁は素文で外側に多少まるみをもつ。瓦当面の径は約13.5センチを測る。

丸瓦部の凸面は縦方向の幅1.7センチのヘラ削りが施される。凹面は型に付した布目圧痕を残し、その上に粘土を足して瓦当部を接合させた後、ヘラ削りで調整される。

この種の文様構成をもつ瓦の系統としては、松江市四王寺跡^{しちおうじ}採集品の四王寺第IV類軒丸瓦^(#3)、同市来美廃寺出土の来美第III類軒丸瓦^(#4)、長門市長門深川廃寺^{ながとふかや}出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦^(#5)が知られる。長門深川廃寺の軒丸瓦は、直径19センチの大形で文様が細部までゆきとどき力強く表現されている。本軒丸瓦と四王

寺第Ⅳ類軒丸瓦は、文様配置や法量から酷似しているが、長門深川廃寺出土の軒丸瓦よりやや簡略した文様表現となっている。また、来美第Ⅲ類軒丸瓦は径で8ミリほど小さいが、文様表現は四王寺第Ⅳ類軒丸瓦と同程度である。

2) 軒平瓦 均整唐草文軒平瓦。中心飾りは杏形葉と支葉が組み合わさった文様である。中心飾りの左右には、単独で表現された唐草文がそれぞれ3回反転する。唐草文の先端は丸くなる。内区と外区は圏線で画され、その圏線が外区内にまでのび井桁状になる。各四隅には珠文が1個ずつ、上外区には11個(推定)、下外区には13個(推定)、脇区には2個ずつ配され、珠文は比較的大振りである。瓦当面の中心部の幅は5.2センチを測る。

平瓦部の上面は布目圧痕を残し、横方向から斜め方向へのヘラ削りを施す。下面は縦方向の幅3センチの荒いヘラ削りを施し、瓦当部との接合部には横方向のナデ調整が認められる。顎の形態は段顎である。

この種の文様の系統としては、出雲市長者原廃寺出土の軒平瓦、松江市来美廃寺出土の来美第Ⅲ類軒平瓦、それに長門市長門深川廃寺出土の軒平瓦がある。長門深川廃寺の軒平瓦は大形で、中心飾りの杏形葉と支葉が整っている。長者原廃寺軒平瓦と来美第Ⅲ類軒平瓦は同程度の文様表現となっているが、本軒平瓦はやや簡略した感がある。なお、来美第Ⅲ類軒平瓦の顎形態は曲線顎で、他の軒平瓦とは異なる形態を示す。

3) 丸瓦 丸瓦は多数あるにもかかわらず、完形品はない。破片の状態から判断すると全てが玉縁式丸瓦で、行基式丸瓦は今のところ見当たらない。凸面は縦方向のヘラ削りのままのものと、ヘラ削り後磨き消しているものとがある。凹面は布目圧痕を残す。

4) 平瓦 平瓦は最も多く採集されるものである。凸面は縦方向の縄叩き目を、凹面には布目圧痕を残す。凹面の側縁近くにこれに平行して布の末端が見られるものや、糸切

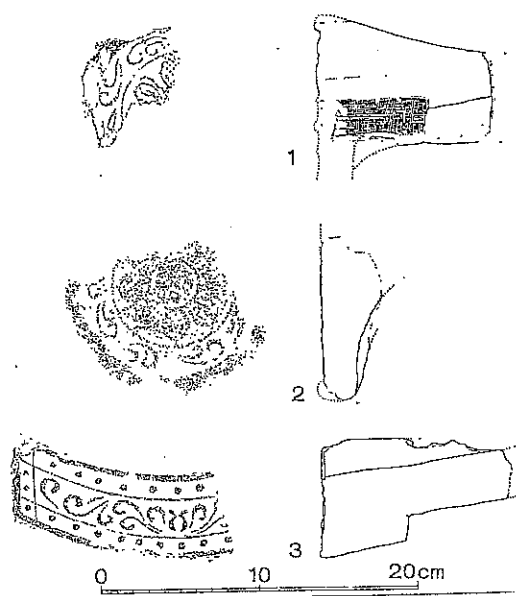


図3 天寺平廃寺出土瓦類実測図

痕も認められることから、凸面使用の粘土板一枚作り技法による製作である。

5) 埴 方形埴で、一辺19センチ、厚さ4.5センチを測る。片面と端面は丹念に削って仕上げられるが、残る片面は指頭圧痕がそのまま残る。

まとめ

最後に、天寺平廃寺にかかる二、三の問題点をあげてまとめとする。

- ① 集落から隔絶した山頂に建立された奈良時代の寺院は稀であり、「出雲国」では他に例をみない。創建当時、この寺院から見渡して目につくものは『風土記』に神名火山として載る仏経山とその麓に存在する伎比佐加美高日子命を祀る曾支能夜社であろう。寺院と社が谷間をはさんであたかも対峙するように位置するのは、寺院の特異な立地と合せ考えて、寺院の造立者と神奈備祭祀およびその集団との深い関わりの反映と推定される^(注6)。
- ② 本廃寺は地形に制約を受けてはいるものの、おおよそ半町四方を寺域とし、その中央部に塔、金堂の小規模な二棟の堂宇を有する。「出雲国」において、現在国分寺(寺域二町四方)を除き寺域と伽藍配置の知れ

る古代寺院はない。1例ではあるが、本廃寺をもってこの地域における私寺の規模を類推することができよう。因に、『風土記』に載る教皇寺および10カ所の新造院は厳堂（金堂）か層塔かのいずれか一方しか記載されていない。

- ③ 本廃寺の軒瓦は、瓦溜より単弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が1セットで発見されている。時期は奈良時代後期に属すると考えられる。^(注7)

この瓦当文様の系統については、山陰地方では前述した如く、松江市来美廃寺（日置君目烈^{（注8）}の建立した意宇郡山代郷の北新造院に比定される）など数カ寺で類例が知られている。このことは、奈良時代における造寺事情や造立者間の政治的動向を知ろううえでの手掛りとなろう。

- ④ 本廃寺の所在する斐川町下阿宮は、律令時代の出雲国出雲郡河内郷に属する。^(注8)739年に作製された『出雲国大税賑給歴名帳』^{（注9）}によれば日置部臣などの日置氏が多く居住する地域であり、また、『風土記』によれば同郷内に旧大領日置部臣布禰（大領日置部臣佐底麻呂^{（注10）}の祖父）が造営した新造院が知られる。

本廃寺と新造院の関係については、瓦の時期差もあり、早計に論ずるわけにはいかないが、本廃寺が日置氏の本貫地である河内郷に造られたことは興味深い事実である。

最後に、本廃寺は1986年11月の分布調査により発見されたものである。本文はそれに係わった西尾克己（島根県教育委員会）、金築基（斐川町役場）、宍道年弘（斐川町教育委員会）が執筆した。

〔付 記〕

本稿を記すにあたって、寺域と伽藍配置については山本 清氏、瓦については上原真人氏にご教示を得ました。末筆ながらお礼申し上げます。また、現地の測量にご協力いただいた以下の各位に記して謝意を表

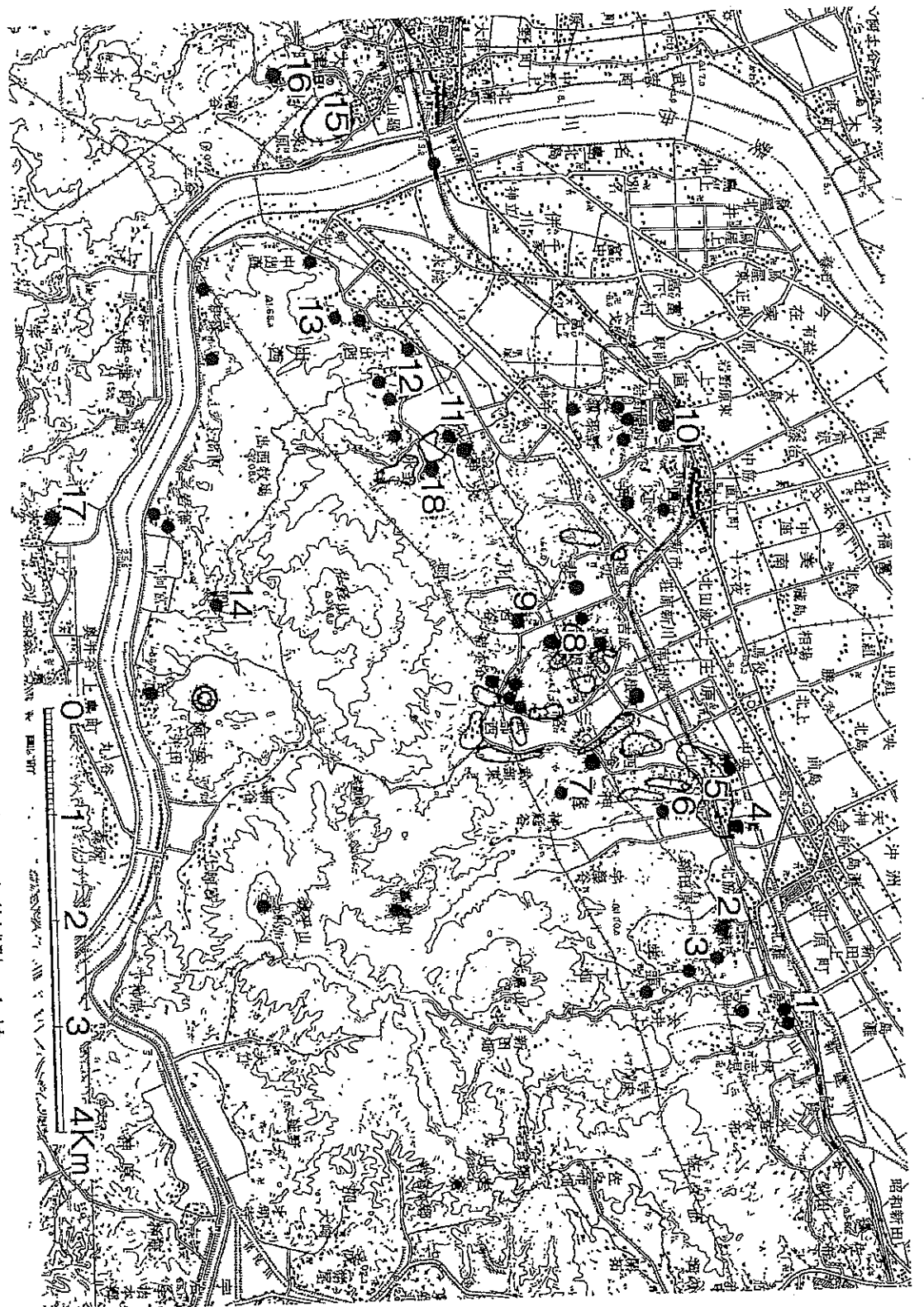
します。

〈敬称略〉

稲田 信 今岡一三 内田久美子 遠藤浩巳 桑原真治 新海正博 常松幹夫 丹羽野裕 萩 雅人 藤原和子 松山智弘

注

1. 岸崎時照の『出雲風土記抄』（1683年稿）以来、上乘寺付近が推定地となっている。なお、近藤正『『出雲国風土記』所載の新造院とその造立者』『日本歴史考古学論叢』二（1968年）では長者原廃寺に比定されている。
2. 池田満雄「古代寺院跡」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会 1980年
3. 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』IV 島根県教育委員会 1985年
4. 近藤 正「寺院」『島根県文化財調査報告』第5集 1968年
5. 「長門深川廃寺」『山口県埋蔵文化財調査報告』第34集 山口県教育委員会 1977年
「長門深川廃寺II」『長門市埋蔵文化財調査報告』第1集 長門市教育委員会 1983年
「長門深川廃寺III」『長門市埋蔵文化財調査報告』第2集 長門市教育委員会 1984年
6. 大國晴雄・西尾克己「楯縫郡の神名樋とその祭祀」『山陰史談』第15号 1979年を参照。
7. 奈良国立文化財研究所の上原真人氏より軒丸瓦は文様、造瓦技法等から奈良時代後期（8世紀後半）に属するであろうとの教示を受けた。また、本軒丸瓦の文様の系統としては、大和郡山市額安寺蔵の軒瓦に類例を求めることができるのではないかと指摘も得た。大和郡山市『額安寺旧境内発掘調査概報』1978年
8. 『風土記』には河内郷は出雲郡家（斐川町出西付近に比定）より正南13里100歩とあり、新造院の距離と同じ記載になっている。
なお、大原郡界の多義村（斐川町上阿宮付近）までは正南15里38歩であり、前述より約960m長い。
9. 『正倉院文書』の一部。同帳によると河内郷に記載の戸数38戸中、日置氏は28戸にのぼる。
10. 『正倉院文書』「出雲国計会帳」（天平6年、734年）の天平5年8月19日の条には「出雲郡大領外正八位下日置臣佐提麻呂」とある。



- ◎ 天寺平廃寺 1. 軍原古墳 2. 大倉横穴墓群 3. 大井城跡 4. 神庭岩船山古墳 5. 神庭丘陵北遺跡 6. 小丸子山古墳 7. 荒神谷遺跡 8. 結遺跡 9. 結城古墳 10. 岩野原古墳群 11. 城山古墳群 12. 後谷古墳群 13. 山ノ奥横穴墓群 14. 高野古墳群 15. 西谷墳墓群 16. 長者原廃寺 17. 上乗寺 18. 曾支乃夜社

図 1 天寺平廃寺と周辺の主要遺跡